奈良県立商科大学「研究季報」第5巻 第4号（1995年3月10日）

ラテン語の発音と表記について

谷　　栄一郎

はじめに
Ⅰ　ラテン語の発音
Ⅱ　半母音ｊの発音
Ⅲ　iiもしくはijの発音
Ⅳ　ｕ、ｖの発音
Ⅴ　二重母音aeの発音
Ⅵ　ｓの発音
Ⅶ　ｃの発音
Ⅷ　ｇの発音
Ⅸ　quの発音
Ⅹ　二重子音
Ⅺ　帯気音（ASPIRATES）の発音
Ⅻ　ｈの発音
XIII　ｚの発音
XIV　母音の長短
XV　hidden quantityの場合
XVI　近代ラテン語の発音（学名の場合）
結　び

はじめに

「ギョエテとはおれのことかとゲーテ言い」という川柳があるが、ラテン語の発音も古来、国により、階層によりさまざまに発音されてきた。ラテン語はローマ帝国が滅亡してからも絶えず学習され続けたが、国家的統一がなくなってしまったため発音は国によって差が生じた。それぞれの国のなまりはそれぞれの国の国語からもっとも影響を受けたように思われる。ローマ法王庁では今に至るもラテン語が公用語になっているが、発音はイタリア語とそっくりである。イタリア以外の国でもそれぞれ特徴ある発音がなされてきたが、20世紀になって言語学の発達と相待って古典期の発音がほぼ復元され、ラテン語の発音も世界的に統一しようという機運が盛り上がってきた。日本では古典学の伝統は浅く、ラテン語の知識が広く浸透しているわけではないが、近年原語の発音尊重という方針が打ち出され、少しづつではあるが、古典式発音が普及しつつある。古典式発音といってもテープレコーダーもなかった今から2000年も前のことなので、どれだけ正確なことが言えるのか、疑問とする向きもあるであろう。ここに古典式発音の根拠を示し、その意義を明らかにし、発音の統一をはかりたいと思う。

Ⅰ　ラテン語の発音

ラテン語の発音は基本的にはローマ字と同じである。英語やフランス語と違って一つの文字を何通りにも読むことはなく、一つの文字は一つの音を表していた。短母音は日本語と同じでＡ，Ｉ，

U，E，Oの五音であるため、日本人にとっては非常に発音しやすい。ただ若干ローマ字と異なる部分がある。例えば、カキクケコの音はローマ字ではka, ki, ku, ke, koのようにkの文字を使うがラテン語ではkはごくまれにしか使われなかった。またwの文字も存在しなかった。日本語とラテン語では音韻の数が違うので、ローマ字では使わない表記も多数存在した。ラテン語は中世から近世にかけてインテリの共通語であったので必然的に膨大な語彙が近代語に借用されており、近代語を通じて日本語の中にもかなりの数のラテン語が入っている。英語を通して入ってきたラテン語は、英語のように発音しても差し支えはないが、現実には一方ではローマ字読み、一方では英語読みが行われ、時にはまったく何の根拠もないでたらめ読みが行われている。英語としては英語読み、ラテン語としてはラテン語で読むことが望ましい。それではラテン語の発音がローマ字とは異なっていて、誤って発音されやすいスペルのみを取り上げることにする。

Ⅱ　半母音ｉ，ｊの発音

子音ｊの音についてはまったく疑問の余地がない。そもそも古典古代においてｊの文字はなかったからである。現在Ｊ，ｊと書かれている言葉はすべて大文字Ｉで書かれていた。ｉとｊの区別はまったくなかったのである。Juliusは常にIVLIVSと書かれていた。ギリシア文字による転写はΙΟΥΛΙΟΣであった。従ってヤ行［ｊ］の音以外の音は全く考えられない。Juliusは「ユーリウス」と発音しなければならない。現在でも古典のテキストにはＪの代わりに古典期と同じようにＩの文字を採用している出版社も多い。ja, ju, joがヤ、ユ、ヨになることにほとんど異論はないが、ギリシア語系の語には注意が必要である。例えばiaspis（碧玉）という宝石があるが、近代語ではこれをjasper（英）、jaspe（仏）、Jasper（独）などと呼んでいるので、ヤスピスと発音しがちであるが、詩中におけるギリシア語系外来語の扱いを点検していくと、ギリシア語はほとんどギリシア語風に読まれていることがわかる。ホラーティウスのCarmina（I,3,3）を例に取ると

obstrictis aliis praeter Iapyga

— — —|- - —|— -|- — - -

のようにIapygaは短長短短とならなければならない。ただ完全にギリシア語風であるならば、「イアーピュガ」となるはずであるが、次に述べる母音間のｉと同様に、Ijapyga（イヤーピュガ）と読んでいた可能性が高い。したがってiaspisもイヤスピスと読むべきであろう。

Ⅲ　iiもしくはijの発音

半母音iの音で一つだけやっかいなのは、ｉが母音間にはさまれている場合である。クウィンティリアーヌスは書いている。(I,4,11)

「キケロはaiio, Maiiamというようにｉの文字をだぶらせて書くのを好んだということを知るべきである。もしそうであるならば、ｉは子音として連結しなければいけない。」

もう少しはっきり書いているのが文法学者テレンティウス・マウルスである。(vi.343)

i media cum conlocatur hinc et hinc uocalium,
Troia sive Maia dicas, peior aut ieiunium,
nominum primas uidemus esse uocales breues,
i tamen sola sequente duplum habere temporis

「TroiaやMaia、peior、ieiuniumのようにｉが母音にはさまれている場合、最初の母音は短母音である。しかし、次にｉが一つ続くので2拍の勘定になる。」

この説明によればTroiaやMaiaを「トローイア」、「マーイア」と発音するのは誤りで、「トロイヤ」「マイヤ」でなければならないということになる。イタリア語のmaggiore（＜maior），peggio（＜peior）の発音もmaior, peiorの発音が「マイヨル」「ペイヨル」であったことを強く示唆する。将軍Pompeiusもポンペイウスではなくポンペイユスとするのが正しいであろう。

Ⅳ　ｕ、ｖの発音

ｕ、ｖの発音もｉ，ｊの場合とほとんど同じである。古典期においてU，ｕの文字はなく、すべて大文字のＶだけだあった。AugustusはAVGVSTVSと書かれた。ｖに母音が続く場合、当然発音は［ｗ］の音であった。紀元後13年か14年に書かれたアウグストゥス業績録によればラテン文のValginius, Vinicius, Octaviaはそれぞれ**Οὐαλγίνιος**, **Οὐινίκιος**, *Ὀκταουία* となっている。ラテン語の

黄金時代の子音ｖはｗの音であったことがこれから明かである。ところがプルタルコスの著作（2世紀始め）ではVariusはΟὐάριοςとなっているものの、VarroがΒάρρωνとなっていてｖの発音が変化してきていることが伺われる。しかし、ラテン語vinum（ぶどう酒）から古い時代に借用された英語のwine（古英語**win**）などを見るとローマ帝国初期ではｗの音が一般的であったことが推測される。［ｖ］の発音が比較的古く、ほとんどの近代語でｖは［ｖ］の音で発音されているので、単語としてのラテン語を読む際は［ｖ］の音でもかまわないと思われるが、ラテン語のテキストは今でもｕ，ｖの文字を区別せず編集されることが多いので、ラテン文を読む場合はやはり［ｗ］の音で発音するのがよいであろう。

Ⅴ　二重母音aeの発音

二重母音ae、oeは「アイ」、「オイ」と発音されるとしている文法書が多い。確かに、古くはai, oiと書かれ、古典期でもギリシア文字で転写されるとαι、οι
となるので「アイ」「オイ」に近い発音であったことは間違いないが、古くai, oiと書かれていたのが、なぜae, oeと書かれるようになったのか、また、発音が「アイ」、「オイ」であるならば、なぜai, oiと書いた碑文が古典期にはほとんど発見されないのか、うまく説明できない。Caeciliusをからかったルーキーリウスの風刺詩（1130 Marx）
Cecilius pretor ne rusticus fiat.（田舎者のケーキリウスが法務官にならないように）
などから、aeは早い時期から長音のｅのように発音される傾向があったことがわかる。碑文でもdiebusの代わりにdiaebusと書いたものがある。aiからｅへの発音の変化はギリシア語、ラテン語に限らず、日本語を始め、数多くの言語において認められる。aiからｅの中間の音としてeiがあると想定されるが、あるいは古典期の標準発音もeiに近いものであったのかもしれない。Caesarはkeisarの形で古高ドイツ語に取り入れられていた。

一方、2世紀の文法家テレンティウス・スカウルスは二重母音ae, auについてつぎのように述べている。(K,vii,16)
「ｕ，ｅの前にａが来た二重母音ae、auは、･･･昔はpictai vestisの詩句に見るようにｅの変わりにｉの文字を使って書かれていたが、･･･これらの<<二重母音>>では最後にｅの音が響く」

もう一つ、oeの二重母音の発音について考慮すべきと思われるのはcoepiの発音である。この動詞はその変化形も含め、本来は二重母音を形成しておらず、コエーピーのように発音されていたのであるが、古典期の詩ではほとんど二重母音と見なされているので、コエピーと発音されていたと考えられる。「オエ」という二重母音が存在していたとすれば、ae, oeの一般的発音を「アエ」「オエ」とすることにそれほど無理はなく、スペルと発音の一致をこの場合も徹底することが可能であろう。

Ⅵ　ｓの発音

ｓがｓと発音されることは明らかであるが、近代語では母音にはさまれた場合、ｚの音になる場合が多い。

例：英 rose, 独 Rose（ローゼ), 伊 rosa（ローザ）
母音に挟まれたｓが濁らないことは、ギリシア語による転写がζでなく、σでなされることからわかる。(例：Caesar＝Καισαρ）　ギリシア語のσは古典期から現代に至るまでｓの音である。またスペイン語でも母音にはさまれたｓの有音化は起きていない。スペイン語でrosaはロサである。

Ⅶ　ｃの発音

英語、フランス語においてはｃの次にｅ，ｉ，ｙが続くと、ｃはｓと同じように発音され、ドイツ語ではtsの音になる。Ciceroは英語ではシセロ、ドイツ語ではツィーツェローとなるわけである。しかし、ｃがｋの発音であったことは次のようなことからわかる。
1.　ギリシア人がラテン語をギリシア文字で書き移す場合、常にκの文字を使っていたこと。ギリシア語のκの音は古代から現代に至るまで常にｋの音であり、古代においてもしｓの発音がされていたらσで表記されたと考えられるからである。例えば、Ciceroは常にΚικερων と転写された。
2.　ラテン語からドイツ語への古い借用語を見ると、ラテン語のci, ceはki, keとなっている。

例：Keller（地下室）＜ cellarium
　　Kiste （大型の箱）＜ cista
これに対し借用の時代が少し後になると
　　Zeder（シーダー）＜ cedrus
　　Zelle （小部屋）＜ cella
のようにｚの文字になっているため、この頃のci, ceはツィ、ツェに近い音に変化していたことがわかる。

Ⅷ　ｇの発音

ｇについてもｃと同じようなことが言える。英語、フランス語などではｇの次にｉ，ｅが続くと[dʒ]、すなわち「ジ」「ジェ」の音になるが、古典ラテン語では常にｇの音が保たれ、それぞれ「ギ」、「ゲ」と発音されていた。ギリシア文字による転写は常にγでなされていた。
例：legio（軍団）＞ λεγιων
後にギリシア語のγは口蓋化するが、古典期の間はｇの音が保たれていた。もし古典期のge, giが「ジェ」「ジ」の音であったならば、ζの文字で転写されたであろう。ドイツ語ではｇの音は現代に至るまで保持されている。ジュネーブの古名GenavaはGenf（ゲンフ）となって昔の音を伝えている。

Ⅸ　quの発音

quが英語のquと同様に[kw]の音であることはよく知られている。ただｋとｗの二つの子音が続いているわけではなく、字音仮名遣いのクワの音のように一つの子音である。それは詩においてquの前の音節が位置によって長くなることがないことから明かである。従ってaquaの発音をアクワと表記するのは正確ではない。アクとワが離れて発音されるわけではないからである。アクゥとするのがよいであろう。

Ⅹ　二重子音

pp, cc, tt等、子音が重なっている場合はローマ字の場合と同じようにつまる。これはイタリア語を見れば明かである。spaghettiはスパゲッティであって、スパゲティではない。スペイン語では二重子音は単子音と同じように発音され、表記も単子音になっているが、二重子音が完全に守られていた古典ラテン語の発音の参考にはならない。従ってAppiusはアッピウスであって、アピウスではない。ll、rrの場合も同様である。イタリア語allora（アッローラ）などの場合と同様である。Catullusはカトゥッルスと表記すべきで、カトゥルスとするとCatulusと区別がつかなくなる。

Ⅺ　帯気音(ASPIRATES)

ph, ch, thの発音について、これらはたいていのラテン語教本にはそれぞれｐ＋ｈ，ｋ＋ｈ，ｔ＋ｈの発音であるように書かれている。すなわちｐ，ｔ，ｋの有気音であるとされている。ラテン語にはもともと帯気音はなく、これらの音はギリシア語の借入に際して入ってきたと考えられている。しかしギリシア語 πορφύρα がpurpuraとなったように最初のうちギリシア語のphはｐと発音され、表記もｐとしてラテン語に入っている。一般のローマ人にとってphの音は正確に発音できず、ｐとして発音されていたことがよくわかる。ギリシアの諸ポリスの征服と相待って多数のギリシア人奴隷がローマに流入し、ローマ人のギリシア文化に対する関心も増大した。ローマ人の貴族の子弟が教養あるギリシア人の家庭教師に任されるようになったのもこの頃である。小さい時からnativeのギリシア語に接したローマ人の発音はギリシア人に劣らぬものになったであろう。そのもっとも典型的な例が雄弁家キケロで、彼はロドス島で当代切ってのギリシア人弁論術教師の前でギリシア語の演説を行い、ギリシアの雄弁はローマに移ったと嘆かせたと伝えられる。この頃のph, ch, thの発音はギリシア語と同じように帯気音で読まれることが確かに多かったであろう。しかし貴族（キケロのような成り上がり貴族を含めて）のローマ人に対する割合は小さく、平民の多数は無気音と帯気音の正確な区別が出来なかったのではないかと思われるふしがある。ギリシア語 μίνθη（ハッカ）はラテン語に入ってmenthaもしくはmentaとなったが、スペルがthでも、ただのｔでも構わないということは二つの発音がそれほど区別されていなかったことを示していると思われる。

Ⅻ　ｈの発音

ラテン詩の韻律上ｈはまったく子音として機能せず、ｈで始まる語が頻繁にエリジョンされるこ

とはhがほとんど発音されていなかったことを強く暗示する。詩ではhはないものとして勘定されるのである。特にhが母音ではさまれるような場合、例えばvehemensやnihilのような語はvemens, nilと書かれることが多い。現代ロマンス語ではhはまったく発音されない。古典期にはhがはっきり発音されていた証拠としてカトゥッルス84歌がよく引用される。カトゥッルスは歌う。

「アッリウスはcommodaと言おうとするとchommodaと言ってしまい、insidiasと言おうとするとhinsidiasになってしまう。・・・アッリウスが向こうに行ってしまってからは、イオニア（Ionia）の海はもはやイオニア（Ionia）の海ではなく、ヒオニア（Hionia）の海になってしまったという恐ろしい知らせが届く」

ここでからかわれている例はすべてhをつけるべきでないところにhをつけてしまった例で、hがついているところをつけずに発音したという例ではない。従ってこの歌から、hで始まる語や、帯気音を持つ語が気息音を伴わずに発音されるのは滑稽に思われたと推論することはできない。むしろ、やたらとhをつけることがおかしいのであって、ギリシア語かぶれをからかう歌ととったほうがよいであろう。ph, th, chを正確に発音することはローマの大衆にとってと同様に日本人にとってもむずかしいので、一応便宜的にp, t, kの音で発音してよいであろう。ドイツ語のp, t, kの発音も正確に言うとph, th, khの音に近いという。

XIII　zの発音

ギリシア語のζの音は本来zdであった。それは語源的にsdであることは'Αθήναζε が'Αθηνασ-δε から来ていることからもわかる。ギリシアの文法家（例えばDionysios Thrax）はζを「σとδから出来ている」と定義づけている(ed.Uhlig p.14)。ラテン詩においてもzはほとんどの場合二重子音と見なされている。しかし、ローマ時代zがsの濁音に過ぎなくなっていたことはΖευς がしばしばΣευς と書かれたり、小アジアの都市SmyrnaがZmyrnaと書かれていることより推測できる。従って散文ではzをzの音で読んでよいであろう。カナによる表記もza, zi, zu, ze, zoはローマ字同様ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾでよいであろう。

XIV　母音の長短

ラテン語には母音の長短がある。英語を始め近代語でも母音の長短があると思っている人が多いが、古典語のような厳密な意味での母音の長短はない。近代語ではアクセントがあると長く発音されるだけである。英語の［i:］と［i］の音価は本質的に異なっていて、実際の場合、didの［i］がdeedの［i:］より長く発音されることがある。日本語も古典語と同じような高低アクセントを持った言葉なので、カナを使っても古典語の母音の長短を正確に再現できる。coronaはコローナであって、断じてコロナではない。しかし、母音の長短がどれほど明確なものであり、一体どんな意味を持つのか認識しておかなければならない。古典語の詩は母音の長短の規則正しい繰り返しで出来ている。例えば、叙事詩人ウェルギリウスのアエネーイスの冒頭の詩句を引用すると

Arma virumque cano Troiae qui primus ab oris

この詩行の母音の長短は次のようになる。

— – | – — – | – — | — — | — | — – | – | — —

単語と単語はくっつけて発音されるので、実際は

— – – | — – – | — — | — — | — – – | — —

となり、長短短もしくは長長の韻脚が繰り返されていることがわかる。詩では1長母音は2短母音に等しいものと計算され、喜劇、悲劇の韻律では比較的ゆるやかな代替が可能であるが、叙情詩、叙事詩では厳密である。従って、詩の出典を調べることによってほとんどの単語の母音の長短が決定される。

母音の長短はロマンス語との比較においても重要である。母音が長音であるか、短母音であるかによって、後の音韻変化が異なってくることが多いからである。長母音のeと短母音のeの場合を見てみよう。アクセントのある長母音のeはイタリア語、スペイン語ではeとして残り、フランス語ではoiに変化した。

例：habere ＞ avoir(仏), haber(西), avere(伊)
　　mel ＞ miel(仏), miel(西), miele(伊)

即ち、アクセントのある長母音のeはイタリア語、スペイン語ではeとして残り、フランス語ではoiに変化した。一方、短母音のeは各ロマンス語で

ie に変化した。

もう一つ、特に最後から2番目の音節の長短はアクセントの位置を決定するもので、さらには英語などの近代語におけるラテン借用語のアクセントの位置を決定する上で重要である。多くの日本人がアクセントの位置を間違えているが、英語の corona のアクセントは最初の音節ではなく、2番目の ro の上に来る。これはラテン語のアクセントの位置に基づいているのである。従って英語との関連においてもラテン語の母音の長短をおろそかにすべきでない。

ただ固有名詞については詩の出典がまったくなく、母音の長短が確認できないことも多いのでそれほど厳密に長短を考える必要もない。

母音の長短の決定に当たって、詩の出典を調べることは重要であるが、詩の韻律上の制約のため時に母音の長短が変えられてしまうことがある。Italia の発音をイータリアとしてある辞書や文法書が見受けられるが、この最初の母音が本来は短く、dactylic hexameter（長短短6韻脚）の詩中では韻律上の制約のため長母音として数えられるということをクウィンティリアーヌスが明言している。(Inst. I.5,18)

XV hidden quantityの場合

二つ以上の子音が続いているとき、黙音＋流音の場合を除いて、韻律上は長音節となるので、詩の韻律を見て、前の母音の長短を決定することはできない。このいわゆる hidden quantity については多くの文法学者の間で議論があり、ラテン文法書、ラテン語辞書の扱いも統一されていない。例えば、magnus の a について、Langenscheidt は長くしているが、Ernout-Meillet は短いと断定している。ラテン文法家 Priscianus の一節に gn の前の母音は長いという箇所があるが、これが後代の挿入である可能性があるので、他の補強材料がなければ、それをそのまま受け入れることはできない。magnus や signum について a に長音符がついた確実な碑文が見つかっていないし、ギリシア文字による長音符を示す転写もない。ロマンス語との比較では gn の前が短いことを示す幾多の事例がある。例えば、signum から派生したスペイン語 seña、イタリア語 segno は明らかに signum の i が短かったことを示している。もし長ければ、それぞれ siña、signo となったはずである。quiesco の e についてはほとんどの文法書で長音とされている。しかし、ゲッリウスはこれについて興味深い1章を割いている。(N.A. VII.15)

すなわち、ゲッリウスの友人の一人がいつものごとく quiesco の e を短く発音したところ、別の友人が、その e は長く発音すべきだと主張したという。以下、引用すると

「その友人は quiescit は calescit, nitescit, stupescit などの動詞と同様に発音しなければいけないと主張した。さらに quies の e は長く発音される、短くはないと付け加えた。もう一方の友人は万事において控えめな性格なのだが、例え、アエリウスやキンキウス、サントラのような文法学者がそう言ったとしても、自分はラテン語の変わることのない慣習に逆らうつもりはなく、不自然な、今まで聞いたことのないような奇異な発音をするつもりはないと言った。しかしながら、この件に関して後に手紙を送り、他の暇つぶしの試論とともに、quiesco について論じ、quiesco は上に述べたような動詞の類ではなく、名詞 quies から派生したのではなく、quies の方が quiesco から派生したので、この語自身はギリシア語に起源を持つことを論証し、quiesco の e を長く発音するのは適当でないことをなかなか味のある議論で力説した。」

e を短く発音した友人はどうやら Anomalist のようであるが、当時のインテリの間であっても、hidden quantity の問題は統一されていなかったことが見て取れる。従ってこのような位置の母音の長短を厳格に考えることはあまり意味がないと言えるであろう。ただし、rex（ギリシア文字転写 ρηξ）のように語源的連想が働く場合はやはり長短をつけたほうがいいであろう。

ns の前の母音は特別である。Constantinus, Constantinopolis がギリシア語で Κωνσταντῖνος, Κωνσταντινούπολις となることはよく知られている。キケロによる明確な証言（Or.,159）もある以上、ns の前の母音が長くなることは疑えない。

XVI 近代ラテン語の発音（学名の場合）

学名を発音する場合も原則として古典ラテン語

の発音に則ることが望ましいが、国際命名規約はスペルの変更をまったく認めていないため、18世紀、19世紀に一般化していたスペルで書かれていることが多く、これをそのまま古典式に読むといくらか無理が生じることがある。例を挙げると、中世にはyはiと全く同じように発音され、純粋のラテン語のiの字がyの字を使って書かれるようなことがよくあり、その習慣はリンネの時代にまで及んでいる。silva（森）は長い間sylvaと書かれてきた。この形容詞silvestrisも学名では普通sylvestrisと書かれる。アメリカの州名のペンシルバニアもPennsylvaniaというスペルである。このようなyを古典式にuウムラウトの音で発音するのは不都合である。1字1音の原則は崩れてしまうが、純粋のラテン語のyはiと読むのが便利である。sylvestrisは「シルウェストリス」と読むのがよい。他に学名によく出てくるyを含む語にclypeus＝clipeus（丸楯），hyemalis＝hiemalis（冬の）、Pyrus＝Pirus（ナシ）などがある。さらに現代人の名前を属名や種小名に使ったりすることがよくあるが、人名にはyで終わるものがある。例えば、スイス人Pertyを記念して名付けられたPertya（コウヤボウキ属）などがそうである。このようなyも[y]の音ではなく、ヤ行の音［j］で読んだほうが発音しやすく、わかりやすい。また明治以後日本人によって命名された動植物の学名には訓令式ローマ字で書かれた固有名詞が含まれていることが多く、日本語のローマ字の発音はやはり普通のローマ字の発音で読むのが自然である。

例：キヌヤナギ　Salix kinuyanagi

日本の動植物であっても江戸時代に長崎に来たドイツ系のの博物学者たちは日本語のヤ、ユ、ヨの音の表記にya, yu, yoではなく、ドイツ語風のローマ字ja, ju, joを当てていた。イチョウの学名がGinkgo bilobaとなっているが、これはケンペルが当時のインテリが使っていた漢名銀杏（ギンキョウ）をドイツ語風ローマ字でGinkjoと書き記したのを、印刷業者がjをgに誤読したものである。これをGinkyoの誤読としている書物も多いが、ケンペルはヤ行の表記にはほぼ常にjの字を使っている。

母音の長短について出来れば古典式にすべてに長短をつければよいが、何しろ学名の構成要素は古典語に由来する語以外のものも多いので、すべての単語の正確な母音の長短を調べることは不可能に近く、アクセントに影響する後ろから2番目の母音の長短だけ正確に読めば十分であろう。Ranunculusは正確にはラーヌンクルスであるが、学名としてはラヌンクルスでよいであろう。リンドウGentianaのような場合はゲンティアナではなく、ゲンティアーナとする。アクセントの位置が違うと欧米の人々と話しをしても通じないことが多いからである。

現代の人名を学名にしている場合は、ローマ字風に読むと読みにくく、かつ原語の発音が簡単なときは原語の発音を入れて読むのがよいであろう。例えばミツマタの学名Edgeworthiaなどはローマ字式にはとても読めず、Edgeworth（エッジワース）という英名は比較的知られているのでエッジワーシアと読んでよいであろう。モクレン科モクレン属の学名Magnoliaはフランスの植物学者Magnol（マニョル）から来ているが、フランス語を習っている人はそれほど多くないので、ローマ字式にマグノリアと読んでよいであろう。

結　び

中国文学では漢文を読むのに現代中国語音で読んでいるという。その方が古代の音に近いからというのだが、表仄がかなり違ってきているので現代音で読んだからといって古代の詩がよくわかるというわけではないであろう。できれば当時の音を復元して読むのが一番よいのである。幸いラテン語は表音文字であり、古代の史料も多く、ギリシア語と対比もできるし、ラテン語から変化したロマンス語との比較研究も進んでいる。古代音の推定は比較的容易で、大部分については確定されている。ただ細かいところは文法学者の間でも異論が多いので、hidden quantityのような細部にまでこだわることはないであろう。

古典ラテン文を読む時と日本文中でラテン語をカナ表記で引用する際に要求される正確さは同じではないが、最近は他の言語においてもますます正確な表記がされてきているので、ラテン語の表記もできれば正確を期したいものである。ただ学名は非古典的要素が多く、さまざまなラテン語表記をも含んでいるためすべてを統一的に表記することは困難である。ただ幸い日本語のローマ字表

記とラテン語表記は非常によく似ているので、原則として古典ラテン語の表記に従うことにして混乱はないであろう。